二〇一四年　十月

「今月の言葉」と「今月の聖語」についての紹介

今月の言葉

人が生まれたときには、実に口の中には斧が生じている。愚者（ぐしゃ）は悪口を言って、その斧によって自分を斬り割くのである。　　**『スッタニパータ』**

「人に七癖　我が身に八癖」　他人の癖は目につきやすく、案外自分の癖は自分では気がつかないものである。だから自分には他人以上の癖があるものだと心得ないといけないということを示す諺です。

言葉が人を傷つける武器になることは、頭では充分理解していることだと思います。しかしながら、私たちは先の諺のように、人の欠点がよく見えることから、自分のことは棚に上げ、時として人の悪口を言ってしまうこともあります。

ここで釈尊は、口の中にある斧で斬り割くのは他者ではなく自分自身だと言います。ひょっとしたら、みなさんのなかにも口の中の斧によって苦い経験をした人がいるかも知れません。日常で口に発する言葉を改めて見つめ直すように教えられる言葉ですね。

今月の聖語

人の生を受くるは難く　やがて死すべきものの　今生命（いのち）あるは　有り難し　　**『法句経』**

釈尊の教えに次のようなものがあります。

ある時釈尊は、大地の砂を手にすくい、弟子たちに次のように質問しました。「この手のひらの砂の数と大地の砂の数は、どちらが多いでしょう。」この問いに対し、弟子は答えました。「もちろん大地の砂の数の方が多いです。」すると釈尊は、静かにうなずかれて、「その通りです。この世の中に生きているものは大地の砂の数くらいたくさんいるけど、人間としていのちを恵まれるものは、手のひらの砂の数ほどわずかなものだよ。」と答えられました。

この世には多くの生物が生きており、その中で、今人間として生きていることの有り難さ、不思議さを改めて実感させられます。

数え切れないほどのご縁で人としてこの世に生まれ、そして限りある「いのち」を今こうして生きています。普段過ごしている一日が、実は大変尊いものだと再認識させられる言葉ですね。

宗教教育係　　合掌